

系統金融機関向けの総合的な監督指針（本編） 新旧対照表

現 行	改 正 後
<p>I-3-4 その他の監督指針等との関係 (新設)</p> <p>Ⅲ-4-10-4-3 リスク管理債権額の開示【共通】</p> <p>(1) (略)</p> <p>(2) 開示区分</p> <p>①・② (略)</p> <p>③ 貸出条件緩和債権</p> <p>ア・イ (略)</p> <p>ウ 過去において債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として金利減免、金利支払猶予、債権放棄、元本返済猶予、代物弁済や株式の受領等を行った債務者に対する貸出金であっても、金融経済情勢等の変化等により新規貸出実行金利が低下した結果、又は当該債務者の経営状況が改善し信用リスクが減少した結果、当該貸出金に対して基準金利が適用される場合と実質的に同等の利回りが確保されていると見込まれる場合、又は当該債務者の債務者区分が正常先となった場合には、当該貸出金は貸出条件緩和債権には該当しないことに留意する。</p>	<p>I-3-4 その他の監督指針等との関係</p> <p><u>I-3-4-3 「中小企業者等に対する金融の円滑化を図るための臨時措置に関する法律に基づく金融監督に関する指針」との関係【共通】</u></p> <p><u>「中小企業者等に対する金融の円滑化を図るための臨時措置に関する法律」（以下「中小企業金融円滑化法」という。）に基づく監督を行うに際しては、「中小企業者等に対する金融の円滑化を図るための臨時措置に関する法律に基づく金融監督に関する指針」の規定を参照することとする。</u></p> <p>Ⅲ-4-10-4-3 リスク管理債権額の開示【共通】</p> <p>(1) (略)</p> <p>(2) 開示区分</p> <p>①・② (略)</p> <p>③ 貸出条件緩和債権</p> <p>ア・イ (略)</p> <p>ウ 過去において債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として金利減免、金利支払猶予、債権放棄、元本返済猶予、代物弁済や株式の受領等を行った債務者に対する貸出金であっても、金融経済情勢等の変化等により新規貸出実行金利が低下した結果、又は当該債務者の経営状況が改善し信用リスクが減少した結果、当該貸出金に対して基準金利が適用される場合と実質的に同等の利回りが確保されていると見込まれる場合、又は当該債務者の債務者区分が正常先となった場合には、当該貸出金は貸出条件緩和債権には該当しないことに留意する。</p>

系統金融機関向けの総合的な監督指針（本編） 新旧対照表

現 行	改 正 後
<p>特に、実現可能性の高い（注1）抜本的な（注2）経営再建計画（注3）に沿った金融支援の実施により経営再建が開始されている場合（注4）には、当該経営再建計画に基づく貸出金は貸出条件緩和債権には該当しないものと判断して差し支えない。</p> <p>（注1）「実現可能性の高い」とは、以下の要件をすべて満たす計画であることをいう。</p> <p>(a) 計画の実現に必要な関係者との同意が得られていること</p> <p>(b) 計画における債権放棄などの支援の額が確定しており、当該計画を超える追加的支援が必要と見込まれる状況でないこと</p> <p>(c) 計画における売上高、費用及び利益の予測等の想定が十分に厳しいものとなっていること</p> <p>（注2）「抜本的な」とは、おおむね3年（債務者企業の規模又は事業の特質を考慮した合理的な期間の延長を排除しない。）後の当該債務者の債務者区分が正常先となることをいう。なお、債務者が農林漁業者、中小・零細企業である場合の取扱いは、系統金融検査マニュアル別冊「農林漁業者・中小企業融資編」を</p>	<p>特に、実現可能性の高い（注1）抜本的な（注2）経営再建計画（注3）に沿った金融支援の実施により経営再建が開始されている場合（注4）には、当該経営再建計画に基づく貸出金は貸出条件緩和債権には該当しないものと判断して差し支えない。<u>また、債務者が実現可能性の高い抜本的な経営再建計画を策定していない場合であっても、債務者が農林漁業者、中小・零細企業であって、かつ、貸出条件の変更を行った日から最長1年以内に当該経営再建計画を策定する見込みがあるとき（注5）には、当該債務者に対する貸出金は当該貸出条件の変更を行った日から最長1年間は貸出条件緩和債権には該当しないものと判断して差し支えない。</u></p> <p>（注1）「実現可能性の高い」とは、以下の要件をすべて満たす計画であることをいう。</p> <p>(a) 計画の実現に必要な関係者との同意が得られていること</p> <p>(b) 計画における債権放棄などの支援の額が確定しており、当該計画を超える追加的支援が必要と見込まれる状況でないこと</p> <p>(c) 計画における売上高、費用及び利益の予測等の想定が十分に厳しいものとなっていること</p> <p>（注2）「抜本的な」とは、おおむね3年（債務者企業の規模又は事業の特質を考慮した合理的な期間の延長を排除しない。）後の当該債務者の債務者区分が正常先となることをいう。なお、債務者が農林漁業者、中小・零細企業である場合の取扱いは、系統金融検査マニュアル別冊「農林漁業者・中小企業融資編」を</p>

系統金融機関向けの総合的な監督指針（本編） 新旧対照表

現 行	改 正 後
<p>参照のこと。</p> <p>(注3) 中小企業再生支援協議会が策定支援した再生計画及び株式会社企業再生支援機構が買取決定等（株式会社再生支援機構法第31条第1項）した事業者の事業再生計画（同法第25条第2項）については、当該計画が(注1)及び(注2)の要件を満たしていると認められる場合に限り、「実現可能性の高い抜本的な経営再建計画」であると判断して差し支えない。</p> <p>(注4) 既存の計画に基づく経営再建が(注1)及び(注2)の要件をすべて満たすこととなった場合も、「実現可能性の高い抜本的な経営再建計画に沿った金融支援の実施により経営再建が開始されている場合」と同様とする。</p> <p>なお、(注3)の場合を含め、(注1)及び(注2)の要件を当初すべて満たす計画であっても、その後、これらの要件を欠くこととなり、当該計画に基づく貸出金に対して基準金利が適用される場合と実質的に同等の利回りが確保されていないと見込まれるようになった場合には、当該計画に基づく貸出金は貸出条件緩和債権に該当することとなることに留意する。</p> <p>(新設)</p>	<p>参照のこと。</p> <p>(注3) 中小企業再生支援協議会が策定支援した再生計画、事業再生ADR手続（特定認証紛争解決手続（産活法第2条第26項）をいう。）に従って決議された事業再生計画及び株式会社企業再生支援機構が買取決定等（株式会社企業再生支援機構法第31条第1項）した事業者の事業再生計画（同法第25条第2項）再生計画については、当該計画が(注1)及び(注2)の要件を満たしていると認められる場合に限り、「実現可能性の高い抜本的な経営再建計画」であると判断して差し支えない。</p> <p>(注4) 既存の計画に基づく経営再建が(注1)及び(注2)の要件をすべて満たすこととなった場合も、「実現可能性の高い抜本的な経営再建計画に沿った金融支援の実施により経営再建が開始されている場合」と同様とする。</p> <p>なお、(注3)の場合を含め、(注1)及び(注2)の要件を当初すべて満たす計画であっても、その後、これらの要件を欠くこととなり、当該計画に基づく貸出金に対して基準金利が適用される場合と実質的に同等の利回りが確保されていないと見込まれるようになった場合には、当該計画に基づく貸出金は貸出条件緩和債権に該当することとなることに留意する。</p> <p><u>(注5)「当該経営再建計画を策定する見込みがあるとき」とは、系統金融機関と債務者との間で合意には至っていないが、債務者の経営再建のための資源等(例えば、売却可能な資産、削減可能な経費、新商品の開発計画、販路拡大の見込み等)が存在することを確認で</u></p>

系統金融機関向けの総合的な監督指針（本編） 新旧対照表

現 行	改 正 後
<p>VI-2 業務報告書等の提出【信連】 (新設)</p>	<p><u>き、かつ、債務者に当該経営再建計画を策定する意思がある場合をいう。</u></p> <p>VI-2 業務報告書等の提出【信連】 <u>VI-2-5 中小企業金融円滑化法第8条第1項の規定に基づく対応措置等に関する報告【信連】</u></p> <p><u>農政局及び財務局において、中小企業金融円滑化法第8条第1項の規定に基づく対応措置等に関する報告を受理した場合には、速やかに、当該報告の写しを農林水産省経営局金融調整課及び金融庁監督局総務課協同組織金融室に送付するものとする。</u></p>